



調律師 鈴木均が語る

―浜松国際ピアノコンクール本選でベートーベンの協奏曲第3番を弾いた鈴木愛美さんが日本人初の優勝、ブラームスの協奏曲第1番を弾いたドイツのヨナス・アウミラーさんが2位でした。

愛美さんは、いいところだらけでした。トリルがきれい、音の粒立ちがいい、メリハリがある。ヨナスさんと愛美さんには三重丸くらの印をつけました。

ヨナスさんは第1楽章でミスタッチが多かったので、審査員がどう評価するかなど思っていました。もし第1楽章がばっちりだったら1位だったかもしれない。それに比べて愛美さんは、技術的な面はほとんど完璧。ブラームスで50分弾



本選で演奏するヨナス・アウミラーさん。11月23日、浜松市中央区で

1位の良さは音の粒立ち

くのか、ベートーベンで30分弾くのかでペース配分が全然違う。そこがコンクールでの選曲の難しさかな。

同じブラームスでも、トルコのコルクマズ・ジャン・サーラムさん(5位)はミスは少なかつたけれど、メリハリがないままで僕は途中で飽きちゃった。ヨナスさんは「もう終わっちゃったんだな」と思っちゃうくらい、3楽章の展開が面白かった。

―愛美さんが3次予選で弾いた、課題曲のモーツァルト四重奏曲第2番も印象に残りました。遊び心、ユ―モアが出場者の中で一番出ていたような。

慣れていると思いましたが、弾くのに必死の人もいる中、愛美さんはメンバーを見ながら呼吸を合わせ、4人で一つの音楽に向かう四重奏の本来の仕事をしていた。あれができなげや室内楽の意味がないですね。

―3位の小林海都さんは既に欧州で実績があり、余裕を感じました。

バルトークの協奏曲第3番は技術的に正確でも、バルトーク特有の「匂い」が薄まり、アメリカンコーヒ―になってしまった。ヤナーチェク、コダーイ、リストなどの曲はバルカン半島の民謡や民俗音楽の変拍子も隠し味になっている。騎馬民族ならではの舞曲のリズムです。(聞き手・南拡大朗)

*次回は1月18日に掲載する予定です。

浜松コンクール観戦記②